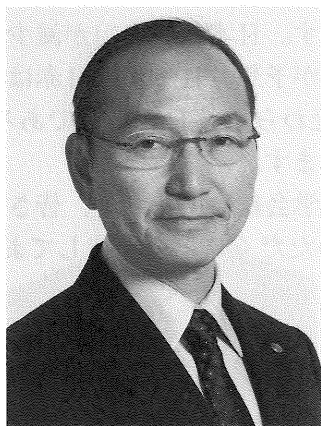


## ごあいさつ



日本赤十字社医学会  
理事長 富田 博樹  
(日本赤十字社 医療事業推進本部 本部長)

本医学会は昭和39年に発足してから今年で54回目の総会を迎えることができました。これもひとえに会員の皆様方のご支援ご協力のおかげであり、心から御礼申し上げます。

本年は6月18日の大阪府北部地震M6.1最大震度6に対して素早く救護班によるアセスメントや避難所の健康管理を行いました。その直後の7月6日に「H30年度豪雨災害」が西日本に大きな被害をもたらし、死者220人、負傷407人そして多くの家屋が被害を受けました。日赤による救護・支援活動は全国の支部・病院が協力して、岡山、広島、愛媛の各県において展開され、救護班87班（日赤DMAT23班含む）災害医療コーディネーターチーム19班、心のケア20班（8月末まで活動）、物資支援として毛布1万枚、安眠セット1397セット等を配布しました。この災害の復旧も道半ばの9月6日に、今度は北海道を震度7の地震が襲い、全道の停電と山崩れなどの被害をもたらしました。この地震での死者は40名、負傷者は640名と大きな被害をもたらしました。北海道の赤十字病院（10病院）はすぐさま対応し、コーディネーター、DMAT、救護班を次々と派遣し、北海道支部の調整の元、道、支部、そして現地（厚真）の災害対策本部にて、コーディネーターが調整をしながら、まずは救護班13班が活動し、さらに第2ブロックから5班が海路にて被災地に入り、日赤のこころのケア班も3班が現在（9月12日現在）も活動中です。停電・断水で機能停止した病院の患者移送のため集結したDMAT隊の指令センターとして、旭川・北見はそれぞれ災害拠点病院としての役割も果たしています。被災地では、断水と不安定な電力の元、今も2千名以上の被災者が避難生活を送っておられます。そこに入っている救護班は、日赤、DMAT、JMAT、国立病院機構などですが、現地は「赤一色」とのことで、圧倒的に多くの赤十字職員が被災者の支援に入っています。赤十字職員のこの活動は頼もしい限りです。常勤の医師がわずか5人で診療を支えている小規模病院からもコーディネーター、救護班を出し続ける活動に、改めて頭が下がる思いです。本社も発災4時間後には、初動班が北海道支部支援に向かいました。4年前に日赤と海上保安庁との間で締結した包括的な災害時の協力協定が威力を発揮しました。北海道への移動の協力要請を午前4時50分にしたところ、20分後にはOKが出て、8時には海上保安庁の飛行機で羽田から千歳に飛び、支部支援に入っています。

21世紀は災害の世紀といわれていますが、毎年のようにもたらされる自然災害に対して、赤十字の災害救護体制が充実してきたことは、国民からの期待に答えているものと、赤十字の存在意義を改めて確認するものであります。被災された方々に改めて心からのお悔やみとお見舞いを申し上げますと共に、この度現地へ派遣された職員の方々、その留守を守った職員の方々、本当にご苦労様でした。

さて、本総会は、日本赤十字社に勤務する全ての職員が参加するもので、赤十字事業に関する知識と技術の向上を目的として、医療や血液事業の分野に限らず、幅広い分野からの発表の場となっております。今回の総会は中部ブロックが担当となり、総会会長を名古屋第一赤十字病院の宮田完志院長が務められ、名古屋第一赤十字病院が事務局を引き受けて下さいました。総会では817題に上る様々な演題が発表される予定と聞いております。会員の皆様にとって、本総会が施設や職種の垣根を越えた活発な意見交換や情報交換を行っていただける場となるべく、宮田総会会長をはじめ名古屋第一赤十字病院の職員の皆様が、プログラムを整えて下さいました。

本年度の総会では宮田総会会長が「人工知能の時代にこそ人の手のぬくもりを ～未来への懸け橋～」とされています。このテーマを選ばれたのは昨年とうかがっておりますが、ちょうどそのころから、AIについて我が国のみならず世界中で急速に関心が高まり、あらゆる分野で、AIが活用できることが明らかになり、活用を超えて、その役割、判断、作業を人にとって代わることも現実味が帯びてきています。その中で宮田総会会長の「AIの飛躍的な発展は間違いなく、未来像は予想もつきかねる昨今です。しかし、いかなる時代にあっても、医療人の手のぬくもりは何物にも代えがたい医の心の具現化です。」との思いをこめられた医学会となりました。まさにこのテーマにふさわしい石黒教授の特別講演「人間型ロボットと未来社会」や人工知能研究センター首席研究員や遠隔病理診断のパイオニア、ICTメディア専門家を迎えてのシンポジウム「人工知能と医療の将来」が行われます。私も特別講話の時間をいただいて「赤十字グループの現状とこれからの取り組み」と題して、我々赤十字病院グループが進むべき方向について語らせていただきます。

宮田総会会長のご厚意で、前回の石巻赤十字病院担当の医学会に引き続き、次の6つの本社企画が実現致しました。救護・福祉部による「国際活動フォーラム」、医療事業推進本部／医療の質向上委員会による「医療の質の評価・医療の改善活動報告」全国大会、及び医療事業推進本部／医療の質向上委員会／チーム医療の推進に関する検討部会による「チーム医療の評価の実践報告」～やろみゃあ！チーム評価～、臨床倫理部会による臨床倫理フォーラム、赤十字購買フォーラム、日本赤十字社救護規則の改正の6つのセッションです。さらに、日赤病院グループの診療科別分科会の発表討論の場を学会プログラムに組み入れていただけました。この分科会は日赤病院グループ内の診療科間の連携を強める目的で私が事業局長時代から推奨している取り組みであり、第49回（和歌山）から始めてこれで6回目となりました。

さらに、本総会に血液事業が多く参加されるとうかがいました。日赤医学会が文字通りのオール赤十字の学会として、大いに意見交換を行える場として育ってきていることを嬉しく思います。

今回の総会を開催していただく名古屋第一赤十字病院は、昭和2年（1937）日本赤十字社愛知県支部名古屋病院として100床で開設され、その後発展を遂げ、高度急性期医療を行う機能のほぼすべてを整備し、平成22年（2010）全面改築を完了して852床の名実共に名古屋を代表する大規模高度急性期中核病院へと成長しています。救命救急センター、地域中核災害医療センター、地域がん診療連携拠点病院、造血幹細胞移植推進拠点病院などの中核的機能の指定を受け、さらに国内での先駆的取り組みである助産師の力を発揮するバースセンターを5年前に開設し、周産期・救急・がん・を中心とした高度医療を実践しています。さらに先進的な医療にも取り組んでおり、京都大学IPS細胞研究所《CiRA（サイラ）》の活動である細胞ストックプロジェクトと協力を結んで当該事業へ積極的な寄与を進めています。赤十字病院グループが本部制となり、グループ間の協力を進めてゆく中で、医師・看護師不足で困窮している病院に対して、積極的に医師・看護師派遣を行ってくださっており、全国92の赤十字病院の牽引役として大いに期待しているところです。

最後になりますが、今回の総会の開催にあたり、総会会長である名古屋第一赤十字病院の宮田完志院長をはじめ、関係者の皆様のご尽力に深く感謝申し上げます。会員の皆様には、今後とも本医学会、そして赤十字グループのさらなる発展のため、一層のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。